第2章

チョーサーにおける接尾辞

2.1　はじめに

接頭辞の場合と同じように、接尾辞も古英語では広く用いられていたが、中英語期になると次第にその生命力を失っていく。しかし、すべての接尾辞が使われなくなっていくというのではなく、それらのなかには今日もなお造語力を維持している接尾辞もある（例えば、名詞を形成する接尾辞 –ity, –ness や形容詞を派生する接尾辞 –able, –ful, –less , –some , –ish など)。ただ、古英語期の接尾辞による語形成と大きく異なるのは中英語に対するフランス語の影響である。この点を Baugh and Cable (1978)は次のように述べている。

> As in the case of prefixes, we can see here a gradual change in English habits of word-formation resulting from the available supply of French words with which to fill the needs formerly met by the native resources of the language.[1]

接尾辞は接頭辞とは異なりその接尾辞が付加されることによって元の基体の文法範疇（つまり、品詞）を変える特徴がある。従って、名詞を派生する接尾辞、形容詞を派生する接尾辞、副詞を派生する接尾辞、動詞を派生する接尾辞に分けて記述する。

Fisiak (1965)は接尾辞を基体の品詞を変更しない接尾辞（例えば、–age , –esse , –ish , –some など）と品詞を変える接尾辞（例えば、–able , –al , –if / –ive , –ment など）とに区別して記述している[2]。このような分類に基づくと、その接尾辞自体が形は同一（例えば、Fisiak (1965)では –ish を –ish$_1$ と –ish$_2$ として記述）でも、本来は別の機能あるいは起源を有する接尾辞と認識され誤解される恐れが生じる。また、このような区別をすることで、それぞれの接尾辞の形態的、統語的、意味的な機能の本質を見誤ることにもなる。

従って、本論考では Fisiak (1965) のような接尾辞の分類はせず、それぞれの接尾辞が付加されることにより名詞、形容詞、副詞、動詞を派生する言語学的現象を基本に論をすすめる。